

事例紹介

仕掛け人インタビュー



古川東部コミュニティ推進協議会
李倅西二行政区長
早坂 利夫さん

ライフスタイルに併せた 無理のない地域づくりへ

古川東部コミュニティ推進協議会では、地域住民の健康増進と、地域のパトロールを目的に、ステップアップ事業交付金を活用した取り組みを行っています。「自分の身を（健康は自分で守りたい）」という気持ちと「子どもたちを見守りたい」という意味を込め、名付けて「みまもりたい」です。地域内で、ウォーキングやランニングに親しむ人に声を掛け、運動啓発のベストを配布しています。

この取り組みの開始にあたって重要視したのは「参加者に無理なく続けてもらうこと」です。理解を押し付けて、義務感や嫌悪感が増し、せっかくの運動が途絶えてしまつては意味をなしません。犬の散歩でも近所を散歩するときでも、好きな時にベストを着用してもらうことで、まずは自身の健康増進に役立ててもら

平成30年9月から、地域住民の健康増進と地域の安全を見守る「みまもりたい(隊)」運動を開始。仲間づくりや孤立防止、地域のコミュニケーションへと穏やかにつなげる、「無理のない地域づくり」を目指す。



▲ 通学時間に合わせた犬の散歩で、「みまもりたい」ベストを着用する地域住民

▼ 平成30年第2回目の交付金審査会。審査は公開で行われます



事例紹介

緒絶地区協議会 緒絶地区地域流コミュニティ基盤整備プロジェクト



行政区長や町内会長などが中心のまちづくりから、新たな人材が参画し、将来、地域をけん引する人材をはぐくむ環境づくりに取り組む。地域住民を講師に迎え、住民の交流の場を目指した「にこにこ学園」を平成29年度から実施、学園形式の協議会活動を展開。おだえ・にこにこ学園実行委員会を設立し、企画と実践、ワークショップの開催、各種まちづくり団体との意見交換会などを行う。地域の声と共に、地域活動への参加と緒絶地区協議会の機能・役割を創造している。

話し合いがはぐくむ ひと・まちのミライ



地域を良くしようと取り組む人たちと、市が進めるまちづくりを特集します。

わたしたちが暮らす「地域」や「まち」が今後どうなるか、どうあってほしいか、皆さんは考えたことがありますか。「地域が元気に存続してほしい」「明るいまちがいい」とは、誰もが感じることです。「より良い地域・まち」とひと口に言っても、たくさんの方の意見を聞き、人によってとらえ方や求める形は異なります。例えば、地域のお祭りや季節の行事が継続していたり、家や道路の周りが清潔に保たれていたり、道ゆく人とあいさつができたり。そんな些細なことが、暮らしの豊かさにつながり、地域やまちの活気にさえ、なり得るのではないのでしょうか。

市内の地域は、商業施設が集まる地域、温泉街がある地域、田園地帯が広がる地域、マガンや野鳥に愛される地域……と、さまざまに気候や文化が異なり、特色があります。また、人口減少や高齢化、担い手不足などに悩む地域も数多くあります。これらの地域それぞれが特色を生かし、時代や環境の変化とともに、存続や在り方を話し合い、実現していくことを「まちづくり」といいます。市では、市民と行政が互いに知恵や情報を出し合い、共に考え、話し合いながら歩む「協働のまちづくり」を進めてきました。

交付金は「大崎市地域自治組織活性化事業交付金を平成19年から導入しています。交付金は「チャレンジ事業交付金」と「ステップアップ事業交付金」の2種類あり、どちらも地域の特性や資源を生かした、持続性を高めるまちづくりに活用できます。2つの交付金を使ったまちづくりの実例を紹介します。

ステップアップ事業交付金

ヒアリング形式で審査が行われ、上限額は20万円です。審査では、審査員と申請者との話し合いが行われ、課題解決に向けたより良い方策を導き出します。チャレンジ事業交付金に比べ、比較の取り組みやすくなっています。

チャレンジ事業交付金

プレゼンテーション形式で審査され、上限額は100万円です。審査では、住民相互の合意形成や自主財源の確保など、地域自治組織の経営力や組織力の高まり、申請に至るまでの過程が重視されます。